

コロナ禍での母親の希望するケアを取り入れたNICU・GCUでの面会効果の検討

轟 香代子[†] 清水由有子 前田里紗 柳澤眞衣
折本菜奈 茂木宏美 筒井志保*

IRYO Vol. 77 No. 4 (227-235) 2023

要旨

【目的】コロナ禍において新生児集中治療室（NICU）・新生児回復室（GCU）入室児の母が主体的に希望するケアを取り入れたことによる効果を知り、今後の面会方法や面会時の看護介入の示唆を得ることを目的とした。【方法】NICU・GCUに入室した児をもつ母親にインタビューガイドを基に半構造的面接を行った。初回インタビュー、希望するケアを実施時の母の言動、退院時インタビューで得られたデータを、母親の心情に焦点をあて分類統合しカテゴリ化し分析した。【結果】対象の母親10名にインタビューを行い、その内容を分析した。初回インタビューでは、272コード、48サブカテゴリー、6カテゴリー、希望するケア実施時では461コード、24サブカテゴリー、6カテゴリー、退院時インタビューでは39コード、7サブカテゴリー、4カテゴリーを抽出した。初回インタビューでは、母児分離による寂しさや孤独、元気に産んであげられなかったことへの罪悪感など、児への申し訳なさが挙げられた。コロナ禍のため希望通りにできないこともあったが、母親の希望するケアを実施することは、コロナ禍においても母の育児に対する主体性を高め、母児愛着形成や育児習得に有効である可能性が示唆された。【結論】コロナ禍による面会制限下においても母親の希望するケアを導入することにより、育児に対する不安が軽減され、医療者の対応への満足へ繋がった。母の抱いている希望を理解した上で、母が主体となってケアに介入できるよう支援することは重要と考えられた。

キーワード 希望するケア, 母児愛着形成, 新生児集中治療室 (NICU), 新生児回復室 (GCU), コロナ禍

はじめに

新生児集中治療室（Neonatal intensive care unit : NICU）や新生児回復室（Growing care unit :

GCU）に入室する児は、点滴治療や酸素療法、経管栄養などの医療的処置が必要な場合が多く、母子分離によって、母親が直接育児に参加しにくい環境であり、親役割を果たすことが難しい状況にある。

国立病院機構高崎総合医療センター 看護部 †看護師

著者連絡先：筒井志保 国立病院機構高崎総合医療センター 看護部 〒370-0829 群馬県高崎市高松町36

e-mail : tsutsui.shiho.re@mail.hosp.go.jp

(2022年11月21日受付 2023年5月22日受理)

An Analysis of Visitation in the Neonatal Intensive Care Unit/Growing Care Unit (NICU/GCU) Incorporating the Mother's Desire into Children's Care during the COVID-19 Crisis.

Kayoko Todoroki, Yuko Shimizu, Risa Maeda, Mai Yanagisawa, Nana Orimoto, Hiromi Motegi and Shiho Tsutsui*
NHO Takasaki General Medical Center, *Corresponding author

(Received Nov.21,2022, Accepted May 22, 2022)

Key words : family-centered care, desired care, mother-infant attachment formation, neonatal intensive care unit (NICU), growing care unit (GCU), COVID-19 crisis

小林ら¹⁾は、「早産で小さく産んでしまった我が子への自責の念と共に、何かをしてあげたいがどのように触れたら良いのか、触れたら我が子に危害が及ぶことはないのかという戸惑いを抱えている母親が多かった。」と述べており、大部分の母は不安や苦悩、無力感を来している。看護師が果たす役割として、本田ら²⁾は「NICUにおいて親子関係の発達支援をすることは、子どもの健やかな成長・発達にも目を向けた家族支援として重要であり、新生児医療に携わる者の大切な役割であるといえる。」と報告している。

近年、親役割遂行の困難さや愛着形成の妨げを解決するため、『ファミリーセンタードケア』の4つの概念(①尊厳と尊重、②情報の共有、③参加、④協働)が提唱され、NICU・GCU入室中であっても家族の積極的な育児介入の必要性が謳われるようになった。

国立病院機構高崎総合医療センター(当院)の面会は哺乳以外のケアを母親が行うことがほとんどなかった。しかし、コロナ禍の面会時間の短縮をきっかけに、母親がどんな思いを持ち、児に対して何を行いたいのか、医療者に何を求めているのか、ニーズを知り、限られた面会時間内でも希望したケアを実施できるように面会方法や育児指導を見直したいと考えた。先行研究ではカンガルーケアやタッチケア等限定されたケアの有用性に関する研究はなされているが、母が主体的に希望したケアを取り入れた研究はなかった。そのため、今回、コロナ禍に限られた面会時間をより有効に活用するために、母が主体的に希望したケアを取り入れることの母児愛着形成や育児習得における有用性を検討しようと考えた。

小泉³⁾は「意思決定において発言権を持つことは、親に、彼らが入院中の子どもに適切なケアを提供するチームに不可欠な要素であるという感覚を与える。NICUにおけるケアに関するもっとも適切な決定は、ケア提供者の職業的専門性と親の価値を、新生児の最善の利益と一致して結合する」と述べている。本研究では、コロナ禍においてインタビュー調査を行い母親の思いを知ること、母が主体的に希望するケアを取り入れたことによる効果を知り、今後の面会方法や面会時の看護介入の示唆を得ることを目的とした。

用語の定義

NICU：新生児集中治療室

GCU：新生児回復室

母子分離：母が子どもと物理的に離れていること

ファミリーセンタードケア：医療者と家族のパートナーシップを認めるケア理念。あるいはパートナーシップを基盤としたケアを行うためのアプローチ

面会制限：患児と会う回数と時間制限を設けること

愛着形成：親と子どもが持つ情愛的な絆、信頼感

面会方法：親が患児と会うための具体的なやり方

母児関係：母親と子どもの相互作用

看護介入：看護師が母親へ明確な意図をもって行う問題解決や回復への援助

研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究である。

2. 研究期間

2021年10月30日から2022年2月28日

3. 研究対象

2021年10月30日—2021年11月30日までにNICU・GCUに入室し、研究の同意が得られ、面会が可能と判断されたNICU・GCUに入室中の児の母

4. 研究方法

プライバシーを保てるように個室で15分程度、インタビューガイドを基に半構成的面接を行い、インタビュー内容をICレコーダーに録音した。初回インタビューでは、①バースプランの振り返り・お産の振り返りとして、母の体調、出産前後のお産のイメージ、児に直面しての感想など、②面会時に希望されるケアとして、児にしてあげたいこと、コロナ禍による面会制限がなければしてあげたかったことなど、母から得られた発言をすべてデータとして記録した。実施可能・不可能、母が児に行うことに限らず、医療者への希望等を含めすべて記録した。

児の状態が安定し、実施可能となった時点で、母の希望するケアを行った。母の希望するケアを実施時には、①母の表情②児への声掛け③愛着に関する発言④ケアに対する発言⑤その他のスタッフが気づ

表 1. 対象者の属性

症例	在胎週数	出生体重	性別	出生順位	母の年齢	NICU or GCU	保育器期間	入院期間
A	38w4d	3,990 g	男	第 2 子	31	NICU	6	19
B	34w6d	1,883 g	男	第 1 子	29	NICU	12	40
C	38w0d	2,529 g	女	第 2 子	40	NICU	7	12
D	38w1d	3,017 g	男	第 1 子	28	NICU	6	16
E	38w2d	2,836 g	女	第 2 子	28	GCU	0	5
F	40w6d	2,791 g	男	第 1 子	40	NICU	8	13
G	35w3d	1,853 g	女	第 1 子	32	NICU	9	21
H	41w4d	2,876 g	女	第 1 子	26	NICU	7	12
I	35w1d	2,345 g	男	第 1 子	27	NICU	6	21
J	33w3d	1,810 g	女	第 1 子	25	NICU	15	43

いた点を記録した。

退院時に希望するケアを実施した感想のインタビューを実施し、希望するケアを実施した感想を記録した。

5. 分析方法

インタビュー結果から逐語録を作成し、カテゴリー別に分類した。枠組みに沿ってインタビューを行い、得られたデータの意味内容を読み取り、一つの意味内容が含まれる単位データとしてカテゴリー化した。

母の希望するケアを実施した結果、退院時のインタビュー結果も同様に、意味内容を読み取り一つの意味内容が含まれる単位データとしてカテゴリー化した。上記の項目について、対象の背景を比較した。

6. 倫理的配慮

母の希望するケアの開始前に書面および口頭にて母へ説明を行い、署名にて同意を得た。初回インタビュー調査においては、研究の意義、目的、中断、撤回が任意にできること、それによる不利益をこうむらないこと、収集したデータは研究メンバー間で共有し、研究目的以外には使用されないこと等を口頭および書面で説明し録音した。また、希望するケアを実施した時の言動・退院時インタビューについては、データとして取り扱うことを説明し、十分な理解を得たうえで記録した。なお、本研究は独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター臨床研究倫理委員会の承認（課題番号2021-34）を得て実施した。

結 果

1. 調査対象

調査期間内にNICU・GCUへ入室した児は10名であった。すべての母10名の同意・協力が得られた(表1)。対象の母の平均年齢は、 30.6 ± 5.1 歳（最小値25歳—最大値40歳，中央値28.5歳），出産経験は、初産婦7名（70%），経産婦3名（30%）であった。児の在胎週数の平均は $37w3d \pm 17.6d$ ，出生体重の平均は $2,593 g \pm 636 g$ で、男児5名，女児5名であった。NICUへ入室した児は9名，GCUへ入室した児は1名であった。児の入院日数の平均は、 20.2 ± 11.6 日（最小値5日—最大値43日，中央値17.5日）であった。

2. 初回面会時のインタビュー結果の分析

初回面会時のインタビュー（バースプラン・お産の振り返り、面会時に希望するケア）より逐語録を作成し、272個コードが抽出された。これらのコードを48個サブカテゴリー、さらに6個カテゴリーに分類した（表2）。表2には抽出された272個のコードから類似したコードを集約し、代表的な81コードを掲載した。

以下、得られたカテゴリーは【】、サブカテゴリー〈〉で示す。初回面会時の母は〈児への申し訳なさ〉〈児の病状の不安・心配〉など児への思いや、〈寂しさ〉〈母親の児への愛着〉など母自身の感情だけでなく、〈他者との比較〉〈児への評価に対する不安〉など他者からの児への評価も含めた【児への愛着・憂慮】がみられていた。【母体の妊娠・出産に伴う経験】では〈出産後の痛み〉〈分娩時の振り返り〉〈出産への恐怖〉などが抽出された。このインタビューでは、出産体験が児への感情に影響を与えているようなサブカテゴリーは得られなかった。コロナ禍の

表2 初回面会時インタビューの分析

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
児への愛着・憂慮	母の児への申し訳なさ	・健康に産んであげられなかった	
	児への評価に対する不安	・友達とかだと、見せない方がよいのかとか ・酸素とか大丈夫みたいな	
	児と過ごした感想	・生まれた初日は一緒にいられた	
	他者との比較	・同じ部屋にいる方で、部屋を開けると赤ちゃん抱っこしている ・お世話されてる方が多かった	
	入院中できることの知識不足	・私たちは何ができるんですか ・全然、思い浮かばない	
	児と触れ合った感想	・なんかこわい ・すごいふにゃふにゃしている ・落としちゃったらどうしよう	
	現状への満足	・好きなようにわりかしさせてもらっている ・抱っこもさせてもらえるし	
	帝王切開への世間の評価	・ネットで調べると結構帝王切開に対して何か色々言われている	
	児への肯定的思い	・元気に泣いてくれた ・コロナから守ってもらっている	
	とまどい	・なんか…どうなんでしょう ・戸惑っている	
	寂しさ	・1日1回で1時間で寂しくもある	
	児の入院による不安	・NICUに入るとは思っていなかった ・入院してどうなんだろうってずっと不安だった	
	母子分離	・通常の出産でできることができない ・子どもに触れたい	
	早産の驚き	・早く産まれてびっくりした	
	児へのねぎらい	・がんばったね ・がんばったんだよね	
	現状への諦め	・夜一緒にいられないのはしょうがない	
	育児をしておける感想	・おっぱいあげられるからまだよい	
	児の病状の不安・心配	・呼吸が不安だった ・子どもの症状が不安	
	抱っこをした感想	・なんか怖い ・すごいふにゃふにゃしている	
	2人目の出産の想像	・妊娠中、2人育てるんだっていう実感があまりなかった	
	児の印象	・ふわふわ過ぎて怖い ・人間てこんななんだ	
	面会制限による不安	・(面会時間が) 短いから寂しい	
	育児に対する不安	・わからないことだらけ ・全部が初めて教えてほしい	
	母親の児への愛着	・可愛い ・ずっと触れていたい	
	出産後の気持ちは安定している	・産むまでは不安だったけど今は気持ちは安定しています	
	面会制限への諦め	・しかたない ・しょうがない	
	面会制限による一緒に入れないことへの寂しさ	・好きな時に会いに来たい ・制限されちゃうとどうしてももっとこうしたいのが出てきちゃう	
	母体の妊娠・出産に伴う経験	出産後の痛み	・痛みがある ・縫ったところが痛い
		分娩時の振り返り	・帝王切開、緊急帝王切開だった ・始めは促進剤を使った
		体調は良好である	・体調や痛みは大丈夫
出産への恐怖		・構えて怖いなど思っていた	
分娩への想像		・1人目を産んでいるから、そんな感じかなくてという想像があった ・周りの友達から聞いてたので想像していた	
同胞の時の経験		・上の子が順調に大きく生まれて、何ともなく順調に育ったから予想外 ・上の子もNICUにお世話になったんですよ	
出産前の準備		・準備もしないままバタバタ産まれちゃった ・帝王切開で予定していたので準備はできていた	
面会時の願望	育児の希望	・抱っこもミルクもあげたい ・クベースから出たら沐浴したい	
	育児(お世話)をしたい	・育児練習がしたい ・初産だから初歩的なことから全部やりたい ・(NICU) に入院していなければできたお世話は全部やりたい	
	児の様子を知りたい	・自分が見れない日常のこととか書いてくれたら嬉しい	
	希望することはない	・何かしてほしいって、とくにない	

	児が入院中の面会時にできることがわからない	・やりたいことは特に思い浮かばない ・なにがしたいんだろう
父への考慮	父の愛着形成	・主人に早く見せたい、会ってほしい ・(父が)ものすごく可愛かったって言ってた
	父への配慮	・父は1回しか会えない ・父は触れることもできない
	夫との思いの共有や希望	・早く夫に会わせたい ・その日の様子とか私だけじゃなくて夫とかに伝わるといいなって
親族の愛着形成への弊害	家族の愛着形成不足	・祖母も抱っこしたかったと思う ・ビデオ通話したい
	親族への配慮	・お祖母ちゃん、お祖父ちゃんに会わせたい
	家族のサポート体制ができていない	・産まれてから少しの間は実家にいる ・家族が協力してくれる
医療者の対応	看護師への遠慮	・看護師さんの無理のない程度で
	看護師への感謝	・感謝しています
	うれしかった医療者の対応	・先生が丁寧に説明してくれた ・看護師が手を握ってくれた

影響として〈面会制限による一緒に入れないことへの寂しさ〉〈面会制限への諦め〉〈夫との思いの共有や希望〉〈父への配慮〉等のサブカテゴリーが抽出された。

希望するケアとしては【面会時の願望】【父への考慮】【親族の愛着形成への弊害】【医療者の対応】などが挙げられ、具体的な希望するケアとして①哺乳や沐浴などの育児手技、②面会時間外の児の様子が知りたい(面会ノートなど)、③父や親族に対する面会制限緩和への希望、④医療者の対応への希望(声掛けをしてもらいたいなど)があった。

3. 希望するケアを実施時の母の言動の分析

希望するケアを実施時の母の言動を記録し、461個コード、24個サブカテゴリー、カテゴリー6個をした(表3)。表3には抽出された461個のコードから類似したコードを集約し、代表的な100コードを掲載した。

面会当初の母は産後の【母の身体的症状】の変化などの訴えや、〈育児の不安や困難さ〉〈育児中の疑問〉などの【育児の不安】を持ちながら面会を行っていた。【母の反応】では、希望したケアを実践していくことによって〈希望するケアを実施しての喜び〉や〈育児に対する意欲〉が湧き上がり、不安な言動は減少していった。また【育児習得】をしていくことによって〈育児習得による母の自信〉や〈母主体の育児〉の獲得にも繋がり、ケアを実施したことへの喜びだけでなく、同時に〈児への愛着を示す言葉〉〈児への愛着を示す行動〉〈児の成長を感じる言葉〉など【児への愛着】が深まっていく言動も聞かれていった。年齢や出産経験が児への感情に影響を与えているようなサブカテゴリーは得られな

かったが、入院期間が長い方が【育児習得】や【児への愛着】のカテゴリーに分類されるコード数が最も多く抽出された。

4. 退院時のインタビュー結果の分析

退院時のインタビュー調査では母の言動を、39個のコード、7個のサブカテゴリー、カテゴリー4個を抽出した(表4)。表4には抽出された39個のコードから類似したコードを集約し、代表的な17コードを掲載した。

【母の児への思い】では、退院が決定し〈入院時の不安〉を振りかえり、病状が回復したことで〈児に対する思い〉が聞かれた。面会時に希望するケアを取り入れたことで〈育児に対する不安の軽減〉が図れ、【育児への自信】に繋がった。【医療者の対応への満足】では面会時に看護師と接する中で〈看護師の児への接し方に対する思い〉と〈看護師への感謝〉が抽出された。【希望したケアへの満足】ではコロナ禍で〈面会時にできなかったこと〉も1件あったが、〈面会に満足する思い〉で退院された。年齢や出産経験が児への感情に影響を与えているようなサブカテゴリーは得られなかったが、入院期間が短い児より入院期間が長い児の母の方が、希望したケアを実施していく中で、〈育児に対する不安の軽減〉に繋がり、【医療者の対応への満足】の発言が聞かれた。

考 察

母は初回インタビュー時に、児と対面できたことへの喜びや愛情を感じるだけでなく、同時に母児分離による寂しさや孤独感などを抱き、児の入室に

表3 希望するケアを実施時の母の言動の分析

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護への思い	看護師への感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・ありがとうございます ・皆さんのおかげです ・かわいがってもらえて幸せ
母の反応	面会中の母の表情	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔見られる ・表情穏やか
	面会中の母の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しそう ・笑顔で穏やかに過ごされる
	希望育児を実施しての喜び	<ul style="list-style-type: none"> ・感動して泣いちゃいました ・本当に嬉しいです ・母乳あげられるのが嬉しい ・上手にできてうれしい ・ミルクをあげられるのが嬉しい
	育児についての学び	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に触ってみると違う ・勉強になります
	育児に対する意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・明日もやりたい ・薬の練習したい ・おっぱいはしたい ・オムツ交換してもいいですか ・お風呂入れたい
児への愛着	不安の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日よくなっていくんですね ・安心します ・胃管が取れてよかった ・コットに出られてよかった
	治療や検査を受ける児への思い	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張ったんだね ・検査頑張って偉いね ・点滴とれてよかった
	児への愛着を示す行動	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいいねと話す ・頬を撫でる ・頭を撫でながら話しかける ・話しかけたり写真を撮る
	児のしぐさに対する母の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・泣いているのを見られて嬉しい ・大きい声で泣いているのを初めて見た ・気持ちよさそう ・上手に飲んでくれる
	児の成長に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張って飲んで大きくなきゃね ・見ない間に大きくなっちゃう ・体重も増えてよかった
	児を心配する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・徐脈はどうですか ・まだコットに出られないのか ・お守りおいてください ・うんちしますか？
	退院へ向けての思い	<ul style="list-style-type: none"> ・寂しいけど楽しみ ・これからずっと一緒にいられて嬉しい
	面会中に実施したいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・手形や足型もとれますか ・お風呂はやりたい ・お薬飲ませたい ・写真をたくさん撮ってください ・母児同室したい ・父方祖父母を連れてきてもいいですか？
	児の成長を感じる言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・飲むのが早くなった気がする ・こんなに飲めるようになって ・大きくなったなあ ・手がよく動く ・ミルクも増えたんですね ・お風呂にも入ってすごい ・体重増えたんだね
	父の愛着形成	<ul style="list-style-type: none"> ・リモート面会は希望しない
育児の習得	母主体の育児	<ul style="list-style-type: none"> ・工夫しながら哺乳する ・使わないでやってみます ・母主体で育児できた ・自主的に行える ・だいぶ慣れた ・児が泣いても慌てず実施できた ・母のみで飲ませられた
	客観的な育児の習得	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いて行っていた ・手技問題なく実施できる ・看護師の介助なく実施できる ・丁寧に行える

		<ul style="list-style-type: none"> ・不慣れな様子ある ・飲んでいるか不安そう ・児が動く戸惑う様子ある ・哺乳、排気の手技上達している ・手技問題なし (9-16.35.38.44) ・不慣れな様子はある
	育児習得による母の自信	<ul style="list-style-type: none"> ・コツがつかめてきた ・ビン哺乳は慣れてきた ・お風呂はもうよい ・慣れてきた ・とくに困ったことはない
	育児に対する意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・またやってみたい ・薬の練習したい ・明日もやっていますか ・もう一回やりたい ・練習したい ・お風呂入れたい
育児の不安	育児の不安や困難さ	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ慣れなくて ・抱き方について忘れてしまった ・うまくできなくてごめんね ・わからないことがわからない ・ぎこちない ・首が座っていないから怖い ・実際にやると難しい ・手順がわからなくなる ・自信がない様子 ・沈んじゃいそう
	育児中の疑問	<ul style="list-style-type: none"> ・おっぱいは飲めるようになるか ・ミルクは足した方がよいか
母の身体的症状	母の身体的症状	<ul style="list-style-type: none"> ・疲労感はない ・腕が痛い ・休めました

表 4 退院時インタビューの分析

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
母の児への思い	入院時の不安	<ul style="list-style-type: none"> ・入院と聞いて不安な気持ちと離れてしまっていて寂しいのことがあった ・初産・双子であり不安だった
	児に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・(子どもが)大きくなったら、生まれたときは体が弱かったんだよ、一緒に退院できなかったんだよって話します
育児の自信	育児に対する不安の軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・一つ一つ教えて下さった ・面会時に練習できたことによって帰ってからの不安が軽減された ・話を聞いて貰って安心した
医療者の対応への満足	看護師への感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートはすごくうれしかった ・早い段階からやっていただけたので嬉しかった ・困った時にすぐ声をかけてくれた ・感謝しています ・みなさんよくしていただいた
	看護師の児への接し方に対する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・日々愛情を持って接していただいているんだ ・面会の時に看護師さんたちにかわいがって貰っているのが伝わってきた
希望した育児への満足	面会に満足する思い	<ul style="list-style-type: none"> ・面会を通して育児全般の練習ができてよかった ・面会は一時間だけだけどその間にたくさんの事ができてよかった ・離れていただけ色々させてもらえてうれしかった
	面会時にできなかったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・リモート面会は希望しない

よって分離されている自身と同室内で母児同室を行っている他者との環境を比較し、元気に産んであげられなかった罪悪感や児への申し訳なさを感じていた。藤野ら⁴⁾は「母親は、早産、子どものNICU入室、そして退院と経過するなかで、喜びや期待、そして不安や喪失感、罪悪感に触れている」と述べ

ている。看護師は母が抱いているさまざまな思いを念頭に置きつつ、コミュニケーションを取っていく必要があると考える。

コロナ禍の面会制限された状況においても、母は面会時に希望するケアを重ねていく中で、少しずつわが子への不安や戸惑いが、触れることができる喜

びへと変わっていった。そして面会時に児と主体的に関わっていくことで〈育児習得による母の自信〉を獲得し、不安や寂しさの軽減に繋がった。大貫ら⁵⁾は「NICU・GCUという異空間にしながらも、親子で時間を共有できる空間や、母親、家族が児に積極的に触れ合い、育児に参加できるような環境を作り出すことで、母子分離状態にある児に対し、わが子であるという思いや児と触れ合いたいという思いが強くなり、母子愛着形成が促進される」と述べている。看護師と共に希望するケアについて成功体験を繰り返したことで、母親は育児に対する主体性を持ち始め、児に対する肯定的感情が強まり、早期の母子愛着形成が促進されたと考える。父や親族に対する面会制限緩和への希望も挙げられた。コロナ禍が長期化する中で、父や親族の面会は母以上に制限されている。父児愛着形成において、適切な感染対策を講じた上での面会は、父や親族に対するアプローチとして重要であると考えられた。一方、実際の面会でなくリモート面会であれば希望しないという回答もあった。面会制限緩和の中で、面会方法や手段などの工夫も必要と考えられた。本研究は、症例数が少ないため結論付けることは難しいが、年齢や出産経験での愛着形成に差はみられなかった。

退院時のインタビュー調査では、【医療者の対応への満足】のカテゴリーも抽出された。看護師は育児ケアの指導だけではなく、母との面会の中で、看護師が答えられる範囲内での児の病状や面会時間外の児の様子など、母に情報提供する役割を担っている。母が希望したケアの中でも、面会時間外の児の様子が知りたいとの要望があったため、面会時にはその日にあった児の様子を伝え、面会ノートを活用し介入してきた。コロナ禍のため、児と実際に関わられる時間が制限されているからこそ、このような希望があったのだと考えられる。北尾ら⁶⁾は「看護師は子どもと家族のすぐそばで毎日ケアを行うため、特別な時間を設ける必要なしに家族へさまざまな情報の提供が可能となる」と述べている。児と母との面会の中で、入院中のわが子との距離を縮め、子どもへの理解を助けるために、看護師の関わり方は重要である。

また、今まで当院では母の希望を確認することなく、看護師主導で哺乳ケア中心の面会対応を行ってきた。しかし、本研究で母の希望したケアを面会に取り入れたことが、〈育児習得による母の自信〉や〈母主体の育児〉といった育児技術の習得に対して有益

である可能性が示唆された。小林ら¹⁾は「看護師が母親の主体的な育児を望むのであれば、看護師自身が母親の主体性を抑制する障壁となってしまっていることに気づくことが重要であると考えられる。」と述べている。看護師の言動が母児に与える影響を理解した上で、看護師が最善と考えた行動や意見だけでなく、母の希望も取り入れていくという看護師側の面会方法への意識の変革も必要であると考えられた。

本研究により、コロナ禍により面会時間が制限された状況下においても、児の入院期間に母親の希望するケアを実施していくことが、児の成長や愛着をより感じられ、育児技術習得に対しても有益であることが明らかになった。看護師もその有益性を理解しながら母主体の面会方法に対応していくことが重要である。限られた時間をより有効に活用するために、母の抱いている希望を理解した上で、母が主体となってケアに介入できるよう支援することは重要と考えられた。

今回の検討は、症例数が少なく、児の出生体重、重症度、母の出産経験などの背景の詳細な比較はできていない。今後、症例数を追加し、背景別の違い、母親だけでなく父親を含めた家族への看護介入効果を検証したいと考える。

ま と め

NICU・GCUに入室中の児の母は、母児分離による寂しさや孤独、元気に産んであげられなかった罪悪感など、児への申し訳なさを抱いている。コロナ禍においても、母親の希望する育児への取り組みは母の育児に対する主体性を高め、愛着形成や育児習得に有効であった。入院中のわが子との距離を縮め子どもへの理解を助けるために、看護師の関わり方は重要である。看護師は面会時の育児の主体は母であることを忘れてはならない。看護師は母の抱いている希望を理解した上で、面会時は母が主体となってケアに介入できるように支援していくことが必要である。

利益相反自己申告：申告すべきものなし

【文献】

- 1) 小林宏至, 水澤香澄, 北村千章. Family Centered Careによる母親の心情の変化. 日新生児看会誌

- 2020 ; 26 : 25-31.
- 2) 本田直子, 杉本陽子, 村端真由美. 早産児をもつ母親がわが子を抱いている時の思いと抱くことの意味. 日小児看護会誌 2015 ; 24 : 44-50.
- 3) 小泉麗. 小児医療における親の意思決定:概念分析. 聖路加看護会誌 2010 ; 14 : 10-17.
- 4) 藤野百合, 中山美由紀. 新生児集中治療室 (NICU) に入院した子どもをもつ母親の思いに関するメタ統合. 大阪府大看護 2011 ; 17 : 65-75.
- 5) 大貫杏, 原田慶子, 福島富士子. 育児期にある母親がNICU入院中に受けたケアに対する思い-退院後2~3年が経過した母親へのインタビューから-. 日母子看護会誌 2016 ; 9 : 87-93.
- 6) 北尾真梨, 津田聡子, 山口智子, ほか. NICUにおける医学上の倫理的意決定の実態と看護師の参加に関連する要因-看護師の役割の考察-. 日小児看護会誌 2018 ; 27 : 83-90.

An Analysis of Visitation in the Neonatal Intensive Care Unit/Growing Care Unit (NICU/GCU) Incorporating the Mother's Desire into Children's Care during the COVID-19 Crisis.

Kayoko Todoroki, Yuko Shimizu, Risa Maeda, Mai Yanagisawa,
Nana Orimoto, Hiromi Motegi and Shiho Tsutsui

Abstract

【Purpose】 The present study assessed the effects of adopting the care desired by mothers of children admitted to the Neonatal Intensive Care Unit/Growing Care Unit (NICU/GCU) and solicited suggestions concerning future visitation and nursing interventions. **【Method】** A semi-structured interview was conducted based on the interview guide. Focusing on the mother's feelings, we categorized and analyzed data obtained from the initial interview, the mother's behavior during the desired care, and the interview at the time of discharge. **【Results】** Ten mothers were enrolled in this study. In the first interview, mothers mentioned loneliness due to separation from their child and feelings of guilt for not having an uneventful birth. Although there were cases in which the desired care could not be provided due to the COVID-19 crisis, it was suggested that providing the care desired by the mother would increase the mother's independence in child-rearing and might facilitate forming attachments and learning child-rearing. **【Conclusion】** By implementing the mother's desired care, anxiety about childcare was reduced, leading to satisfaction with the medical staff's care even during the COVID-19 crisis. After confirming the mother's wishes, it was considered important to support the mother so that she could take the initiative in intervening in care.